The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	二つのOrigoと視点
Author(s)	瀧田, 恵巳
Citation	言語文化研究. 2018, 44, p. 69-88
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68014
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

二つの Origo と視点

瀧　田　恵　巳

Doppelte Origo und Point of View

Emi TAKITA

Zusammenfassung: Diese Abhandlung behauptet, dass durch die doppelte Origo, „Origo innerhalb des Zeichens“ und „Origo außerhalb des Zeichens“, und den Gesichtspunkt „Point of View“ grundsätzlich erklärt wird, warum im Beispiel（1）der Sender sich selbst einerseits nicht beschreibt, wenn das Ereignis als sich vor den eigenen Augen ereignend dargestellt wird. Andererseits kann der Sender sich selbst mit Abstand beobachten, wenn er sich mit den deiktischen Ausdrücken wie „ich“, „mein“, „mir“ wie im Beispiel（2）beschreibt. Durch deiktische Ausdrücke wird die Origo innerhalb des Zeichens in den dargestellten Bereich eingeführt, während der Sender außer des Bereichs bleibt und seinen Gesichtspunkt in den Bereich hinein sendet. Wenn der Gesichtspunkt mit der Origo übereinstimmt, dann wird die Origo, aufgrund der Eigenschaft des Senders als Origo außerhalb des Zeichens, nicht beschrieben. Die Darstellung wirkt dann so, als wäre der Sender innerhalb der Szene.

キーワード：Origo の二重性[1)]，視点，視角構図（viewing arrangement）

1．二つの事例と問題提起，及び本論文の構成

本論文の重点は，ダイクシス現象に関わる次元の異なる二つの Origo と視点にある。ここでいう視点とは，宮崎・上野（1985: 3）にあるように，「どこから見ているか」というときの「どこ」，つまり観察や描写の起点に相当する。Origo「原点」とは，端的にいえば「指示場の中心」である。視点も Origo も第一に話し手に結び付けられる。そこでまず会話文と話し手との関係を具体的に検証するところから始めたいと思う。次の文章は，ミヒャエル・エンデの『はてしない物語』から引用した原文のドイツ語とその日本語訳である[2)]。

1）本論文は2017年9月30日に日本独文学会秋季研究発表会で発表した内容に適宜加筆修正したものであるとともに，瀧田（2017a，2017b）で人称とコソアの意味記述の分析に適用した Origo の二重性を，Langacker（1985）の理論にも適用する試みでもある。

2）物語の会話文は，以下の Hamburger（1977）による説明にもあるように，通常の会話文とは異なり，語りの機能の一

（1） Während er noch überlegte, was Mondenkind wohl von ihm erwartete, fühlte er plötzlich ein zartes Kribbeln auf seiner Hand. Er sah genauer hin.

»Schau mal, Mondenkind!« flüsterte er, »es fängt ja an zu glimmen und zu glitzern! Und da – siehst du's – da züngelt eine winzige Flamme heraus – . Nein, das ist ja ein Keim! Mondenkind, das ist ja gar kein Sandkorn! Das ist ein leuchtendes Samenkörnchen, das zu treiben anfängt!« （UG: 195）[3)]

月の子がいったい何を自分に期待しているのだろうと考えていると，不意に掌が少しくすぐったくなった。バスチアンは目をこらして見た。

「あっ，見てください，月の子！」かれはささやいた。「何か，ちょっと光ってきた。チカチカって―ほら，見えるでしょ。―あ，炎があがった。小さい炎だ。おや？これは種子だ！月の子，これ，砂の粒なんかじゃないよ！光る小さな種子だ。それが芽をふきはじめたんですよ！」（275）

（2） »Wachsen die Früchte denn auf deinem Hut?« erkundigte sich Bastian verblüfft.

»Wieso Hut? « Dame Aiuóla blickte ihn verständnislos an. Dann brach sie in lautes, herzliches Lachen aus. »Ach, du meinst wohl, das ist mein Hut, was ich da auf dem Kopf habe? Aber nein, mein schöner Bub, das wächst doch alles aus mir heraus. So wie du Haare hast. Daran kannst du sehen, wie ich mich freue, daß du endlich da bist, darum blühe ich auf. Wenn ich traurig wäre, würde alles verwelken. Aber bitte, vergiß nicht zu essen!« （UG: 387）

「この果物，おばさまの帽子になるの？」バスチアンはびっくりしてたずねた。

「帽子ですって？」アイゥオーラおばさまは，きょとんとしてバスチアンを見た。それからたのしくてならないというように，大声で笑いだした。「ああ，そう，あなたったら，この頭の上にあるのが帽子だと思ったのね。そうじゃないのよ，ぼうや。これはみんなわたしから生えているの。ぼうやの髪の毛とおなじよ。ほら見てごらんなさい，やっとぼうやがきてくれたので，わたしうれしくって，花盛りになったでしょ。悲しいと，みんな枯れてしまうのよ。あら，食べるのを忘れちゃだめ。もっとおあがり！」（532–533）

(1) と (2) の下線部の会話文には，描かれる情景と話し手との関係に次のような相異が見られる。(1) は，話し手バスチアン（Bastian）が目の前の自分の手にある砂の粒と思っていた物から今まさに炎が出てくる様子を相手に聞かせる場面である。この描写される出来事は，話し手

つで，語り手は自ら虚構の人物となり，対話を通じて物語を展開させる。本論文では，物語の会話文を，描写の優れた事例であり，且つ話される状況と話し手との関係もとらえやすい点で，研究対象として通常の会話文より適格であると判断した。

Das zeigt sich darin, daß das Gespräch ja keineswegs nur die Gestalten selbst in ihrem Da- und Sosein darzustellen hat, es übernimmt auch in hohem Maße die rein schildernde Funktion des Erzählens.（Hamburger 1977: 143）

このことはつぎの点に現れている。すなわち会話たるもの，単に人物たちそのものをその現存，斯在（Sosein）をとらえて叙述して足れりとするものではけっしてなく，語りの純粋描写的な機能をも高度に担っている。（137）

3）本論文における引用及び例文の末尾には，参考文献及び引用文献の略号と引用箇所のページ数を括弧付けで付記し，場合に応じて日本語訳を記載する。日本語訳については，出典があれば引用箇所のページ数のみを括弧つきで記載する。

にとって今まさに起こりつつある未知の出来事である。それに対して（2）は自分の体から果物を実らせる婦人が，帽子のように見えるものは自分の体から生えていることを解説する場面で，描写される事柄は話し手にとって周知の事実である。

これら二つの会話文は，話し手自身の描写に大きな違いがある。話し手が今まさに目の当たりにする出来事が描写される（1）の事例では，話し手は言語上明記されていない。それに対して（2）では「わたし ich, mein, mir, mich」と明確に記述されている。

さらにダイクシス表現そのものに関わる問題も認められる。

二重線で表示したドイツ語文中の heraus は，話し手への方向を表す her と内なる領域から外への方向を表す aus を構成要素とする合成語で，内なる領域から話し手側の外への方向というダイクシス的意味を持つ。この意味から考えると，（1）の heraus は，炎が内なる空間である粒の中から話し手の視界へ向かう方向を指すので矛盾しない。しかし（2）の heraus は，話し手の体内から体外への方向，つまり厳密にいえば話し手から離れる方向を表すため，一見ダイクシス的意味に矛盾するように思われる。だが（2）の heraus がダイクシス的意味に適合する解釈もある。それは三浦（1976: 128f.）が指摘するように，自分を描写する際に話し手は描写の主体と描写の対象に観念上自己分裂する[4)]と見なすのである。すると描写する話し手は描写対象として客体化された自分「わたし（mir）」を体の外の立場から見るという解釈が成立し，heraus のダイクシス的意味に適合する。実際この話し手は自分の体をまさに外から見ている。

こうした話し手の描写に関わる現象について，本論文では次の問題を提起する。

第一に，（1）に見られるように，出来事が話し手の現前でまさに展開するという臨場感あふれる描写と話し手が言語上明示されないこととの間には，何らかの必然的なつながりがあるのだろうか。第二に，（2）のように自分自身を言語上明示するとき，話し手は観念上自己分裂するとみなすことは，言葉の意味を考えるうえで適切といえるだろうか。もし適切であるとすれば，（1）との間にどのような連続性が成立するのだろうか。

第一の問題に関しては，先行研究として Langacker（1985）の三つの視角構図が挙げられる。それは話し手が中心的な役割を果たす「基盤 ground」と叙述との関係を説明するものであるが，2 ではその概略を説明し，二つの事例を当てはめたのち，この理論の問題点を指摘する。3 ではその問題点を受け，Langacker（1985）の ground に類似する概念として Bühler（1934/1982）に

4）三浦（1976）は，時枝（1941/2007: 59）による「主体の素材化」（本論文3.1の引用（11）を参照のこと）を受け，代名詞の用法における話し手とその対象との関係を次の様に説明する。
「さきに第一部第一章で，「夢」を見るときにはいつも人間の観念的な自己分裂が起こること，言語表現でも，想像を語る場合にはこの自己分裂によって観念的な話し手が成立することをお話ししました。〈代名詞〉について考えるときにも，この自己分裂を無視したのでは正しく理解することができません。一人称の表現の場合，見たところ対象となっている自分と話し手は同一の人間です。しかし**何かを対象としてとらえるということは，対象から独立してその対象に立ち向かっている人間が存在しているということなのです。**対象とそれに立ち向かっている人間とが同一の人間であることはできません。**一人称の場合には現実に同一の人間であるように見えても，実は観念的な自己分裂によって観念的な話し手が生まれ，この分裂した自分との関係が一人称として表現される**のです。「話し手と話し手自身との関係」というのは，このような認識の構造において成立しているのですが，〈代名詞〉の本質は話し手と対象との関係を表現するということで，その関係が現実に存在するか，それとも自己分裂によって観念的に成立したかは，本質と関係ありません。」（三浦 1976: 128–129）（強調は原著者による）

よるOrigo「原点」を取り上げ，Origoの代用とされるダイクシス表現と話し手との関係について論じたのち，二つのOrigoを提言する。これは第二の問題である話し手の自己分裂に関連する。4では，Fricke(2003）による具体的な言語現象によって，二つのOrigoの共存とその相互作用を裏付け，Origoの典型性と視点との関係を考察する。5では，Langacker（1985）の三つの視角構図を二つのOrigoと視点によって再検討し，冒頭の二つの事例も取り入れ，話し手自身を言語上明記するメカニズムを明らかにする。6では結論として冒頭の問題を取り上げ，今後の課題を提示する。

2．Langacker（1985）による三つの視角構図とその問題点

Langacker(1985）は，まず主観性を次のように規定する。

（3） Subjectivity pertains to the observer role in viewing situations where the observer/observed asymmetry is maximized. （Langacker 1985: 109）
主観性は，観察者と観察対象の非対称性が最大となる視覚状況の観察者の役割の内にある。

Langacker（1985: 120）は，「主観的subjective」と「客観的objective」という用語を，上記のように知覚状況にある観察者（observer）と観察される存在（entity that is observed）の非対称性に対応させた意味で用いる。私たち（観察者）は物（観察される存在）を観察するが，物は私たちを観察しない。この点で，知覚関係は非対称的である。また，観察者は自分自身を他の個体のようにたやすく観察することはできない（例えば一般的に自分の横顔や後頭部を見ることはできない）という点で，反射的ではない（Langacker 1985: 120)。これらの感覚組織（例えば視覚）には，それが適用される領域（例えば視野）内に限定されたゾーンがあり，このゾーン内にあるものは他の領域にあるものよりはるかに敏感に知覚される（Langacker 1985: 121)。

なおLangacker（1985: 123）は，知覚イメージ（perceptual imagery）と全ての概念（conception）との境界が不明であるため，両者を同じ基本的な認知原則の移行的な現れと見なしている。

Langacker（1985: 121）によると，観察者と観察される存在との非対称性を最大にする要因は次のとおりである。

第一に，観察者と観察される存在は完全に区別される。第二に，観察者は自分の注意を観察される存在のみに集中させるため，自分への意識は完全に無くなるか，著しく減少する。第三に，観察される存在は非常に際立っており，最大限に鋭敏にとらえられる領域，即ち後述する「客観的舞台objective scene」もしくは「舞台stage」におかれる。

以上の見解に基づいて，Langacker（1985: 125）は主観性とダイクシスに関する表現を，次の三つの視角構図（viewing arrangement）に基づいて説明する。

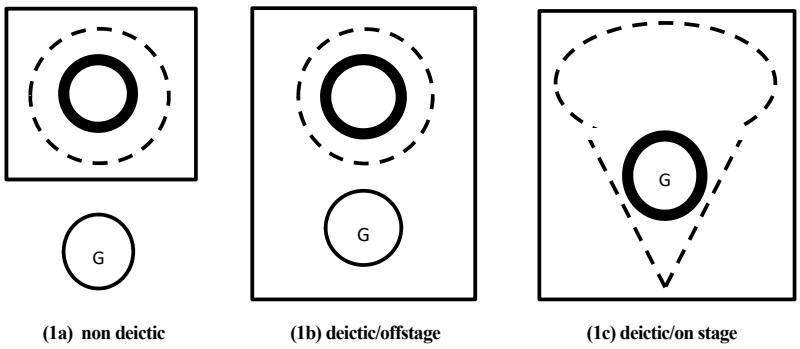


図１　三つの視角構図（viewing arrangement）（Langacker 1985: 125）

これらの図には次の四つの主要概念が表示されている[5)]。

まず丸で囲まれた G は「基盤 ground」を示す。Langacker（1985: 113）によると，ground は reference の拠点で多岐にわたるが，発話という出来事，その背景，参与者を表示するため，話し手がその中心的な役割を果たす。また ground は観察者の役割も併せ持つため，「視点 vantage point」を担うものとしても扱われる（Langacker 1985: 127）。

実線の四角で囲まれた領域は「叙述スコープ（ベース）scope of predication（base）」で，その言語表現が必ず接触する関連領域である（Langacker 1985: 110）。

叙述スコープ内の点線に囲まれた領域は，特に客観的かつ鋭敏にとらえられる領域で「客観的舞台 objective scene」もしくは「舞台 stage」と呼ばれる（Langacker 1985: 122）。

この舞台内の太線の○は，言語表現によって指定され，叙述スコープにおいて最大限に顕在化される副構造で（Langacker 1985: 110），「輪郭づけられる存在 profiled entity」（Langacker 1985: 124）であることから profile と呼ばれる。つまりこの profile が言語表現によって明示される。

まず三つの視角構図は，ground が叙述スコープから完全に除外される場合（図 1a）と ground が叙述スコープ内にある場合（図 1b, 1c）に大別される。Langacker（1985: 113）によると，ダイクシス表現は ground もしくは ground のいくつかの面をその叙述スコープに含む表現である。従って，ダイクシス表現が適用されるのは，後者のケースである。

図（1a）では，ground と profile は完全に区別されるため，ground は最大限に主観的，profile は最大限に客観的であるとされる（Langacker 1985: 121）。この最大限に客観的な profile には，ダイクシス表現は適用されず，例としては，大部分の裸名詞や Tuesday is the second day of the week「火曜日は週の第二番目の日だ」（Langacker 1985: 113）という文の Tuesday のような非ダイクシス表現が挙げられている。

それに対して ground が叙述スコープに介入する場合は，叙述にダイクシス的な要素が加わる。

5）Langacker（1985）で用いられる概念の表記は，原則として日本語訳を用いるが，ground, profile, offstage, on stage については，表記上の利便性により原典通りとする。

このダイクシス表現が関わる視角構図には，groundが舞台に上がらないoffstage（図1b）と，groundが舞台に上がるon stage（図1c）がある[6)]。

図（1b）のoffstageの場合，groundはprofileと区別されつつprofileを指定する「参照点reference point」となるが，groundの概念化は最小限にとどめられ，言語表現として明示されない。例としてはTuesday was hectic（Langacker 1985: 113）「火曜日は忙しかった」という文のTuesdayが挙げられている（Langacker 1985: 125）。このTuesdayには，発話時から見た特定の火曜日を指すというダイクシス的な特徴が見られるが，この場合groundである発話時は参照点として機能するものの，言葉として表現されていない。従ってこのTuesdayの事例には，groundが舞台の外にあるoffstageの視角構図（図1b）が当てはまる。

図（1c）のon stageでは，groundは，いわば拡張された客観的舞台内に位置づけられ，profileと完全に一致する。例として話し手を表すIが挙げられている（Langacker 1985: 125）。

Langacker（1985: 125–126）によると，groundが概念化の対象として顕著になればなるほど，観察者と観察される存在との非対称性が次第に減少し，それに伴ってgroundの主観性も減少する。従って図（1a）のgroundは最も主観的であり，図（1b）のgroundの主観性はやや低下するものの，最小ではない。確かにgroundは叙述スコープの内部にあるが，舞台裏で参照点であり続けるため，概念化の対象としては最小で，言語上明示されないからである。それに対して図（1c）のon stageでは，groundが客観的舞台の中心的な存在としてprofileされ，言語上明示されるため，その主観性は最小限にまで減少し，観察者と観察される存在の非対称性は中和される。

Langacker（1985）による主観性とダイクシス表現に関する視角構図の概略は以上である。では，冒頭の物語の会話例（1）と（2）は，三つの視角構図のうち，どれに当てはまるだろうか。

先述したように，観察者が観察対象に集中するあまり我を忘れるというのが主観性の要因であるならば，（1）は図（1a）の視角構図に当てはまるかのように思われる。確かに（1）において，話し手は自らを叙述内容としてはいない。しかし（1）の叙述内容にはgroundによって指定される要素が含まれている。なぜなら叙述される状況はダイクシス表現herausなどによって指定されているからである。つまり（1）は，groundが参照点ではあるもののprofileされない図（1b）のoffstageに該当する。（2）は話し手自身が叙述の対象となることから，groundが舞台に上がる図（1c）のon stageに適合する。

以上のようにLangacker（1985）の三つの視角構図は，（1）と（2）のような事例を明確に区別する手段として極めて有益である。しかしこれらの視角構図には次の三つの問題が認められる。

第一の問題は，Langacker（1985）のいう「主観性」にある。その主観性は，もともと観察対象と最も明確に区別される観察者にある。従って三つの視角構図の図（1a）から（1c）に移行する

6）Langacker（1985: 121f., 134f.）において，図（1b）の視角構図はoptimal viewing arrangement「最大の視角構図」，図（1c）の視角構図はegocentric viewing arrangement「自己中心的視角構図」と呼ばれている。しかし厳密にいえばgroundの主観性が最大となるのは図（1a）であり，また図（1b）の視覚構図はダイクシス表現が適用されるという点で自己中心的でもある。以上の点からこの二つの名称を，本論文では取り扱わないものとした。

に従い ground の主観性が弱くなり，(1) の ground は (2) の ground よりも主観的ということになる。確かに，目の前で今まさに展開しつつある出来事を描写する (1) の話し手は，観察対象との区別が明確で，かつ自分の目で見たものを伝えているという点で，自分自身を解説する (2) の話し手より主観的と言える。しかし主観性には様々な局面がある。別の見方をすれば，(1) の描写は，聞き手にも同じように見えることを前提としている点では，話し手が自分自身の経験から解説する (2) の描写よりも客観的である。

また Langacker（1985: 121）の主張では，言語によって明示される profile は，ground と最も明確に切り離される図 (1a) の視角構図のものが最も客観的である。事実，裸名詞や週の二番目の日とする Tuesday は，特定の話し手に限定されない極めて客観的な内容である。しかしこの最も客観的な profile に最も主観的な ground が結び付くというのは一体どういうことなのだろうか。

Langacker（1985）は主観性の最たる状況を演劇における観客と俳優との関係にたとえている。

（4） The actors on stage are viewed in fully objective terms by the observers seated in the audience. To the extent that these observers are completely engrossed in the performance, thereby losing all awareness of SELF, their own participation in the viewing process is maximally subjective.（Langacker 1985: 122）
舞台上の俳優は，完全に客観的な用語でいえば，観客席に座っている観察者たちによって視られている。それ故に，これらの観察者たちがその俳優の演技にすっかり没頭し，「自分自身」へのあらゆる注意を失う限りにおいて，彼ら自身の視る作用への参与は最大限に主観的なのである。

上記のたとえでいえば，舞台上で演技を行う俳優が profile， 聴衆の中にある観察者が ground となり，ground は我を忘れて profile に没頭することで主観的になる。しかしこの演劇の比喩は言語による描写には一致しない。なぜなら，ground の主観性が最大であるとされる図 (1a) の視角構図であっても話し手は叙述に関わり，いわば舞台上の演技もまた話し手が表出するからである。また演技に没頭する観察者は，心情的には俳優と共に舞台上にあることを考慮すると，この観察者の心的状況はむしろ図 (1b) と図 (1c) の視角構図に当てはまる。

第二に，確かに三つの視角構図は，ground と言語記述の関係を図示してはいる。しかし図 (1b) の offstage で ground が言語上明記されないメカニズムと，図 (1c) の on stage で ground が言語上表現されるメカニズムは明らかにされていない。

第三の問題は，ground の不明瞭さにある。Langacker（1985: 127）のいうように，ground は観察者で視点をつかさどる話し手に代表されるとしよう。図 (1a) の視角構図では，ground は叙述のスコープの外にあるため，話し手は観察者として叙述スコープ内にある profile を観察し叙述することができる。だが図 (1b) の offstage の場合，ground が叙述スコープ内に入る。さらに図 (1c) の on stage では，profile=ground で観察者であるはずの話し手が観察対象となる。このとき ground を観察する主体はいったいどこにあるというのだろうか。

groundを観察者とするならば，話し手が観察の対象となるときには別のgroundを設定せざるを得ない。このことはLangacker（1985）の論述そのものが証明している。Langacker（1985: 125）は図（1c）のon stageの例としては話し手を表すIしか挙げていないが，on stageから派生した「言い換えdisplacement」と「異世界自己同一視cross-world identification」（後述の図2）では様々な具体例を扱い，その際profileを観察する新たなgroundを導入する。まず「言い換え」（Langacker 1985: 127f.）とは，話し手が自分を別の観点から言い換えるケースで，例えば母親が子供に対して（5a）の代わりに（5b）を発言するケースが挙げられる。

（5a）Don't lie to me!　　私にうそをつかないで。

（5b）Don't lie to your mother!　　（あなたの）お母さんにうそをつかないで。（Langacker 1985: 127）

Langacker（1985: 127–128）によると，（5b）の事例では，母親が第三者的な視点（この場合おそらく聞き手である子供の視点）を想定し，自分自身をまさに他者の目で記述しているかのように記述する。このとき視角構図には，profileされるground要素を言語表現として記述する目的で想定された新たなground（G'）が導入される。そして話し手をGからG'に概念上置き換えることにより，指し示される存在はoffstageから観察されることが可能となる。

一人称代名詞の事例についても新たなgroundが導入される。Langacker（1985: 129f.）によると，「異世界自己同一視cross-world identification」は，話し手が，写真や映画，夢などの別の世界における自分をgroundの亜種，即ちG'としてprofileする視角構図である。例として，写真の自分を指す発言（6a）と映画のストーリーにおける自分を指す（6b）の二番目の文が挙げられる。

（6a）That's me in the middle of the top row.　　（Langacker 1985: 129f.）

一番上の列の真ん中にいるのが私だ。

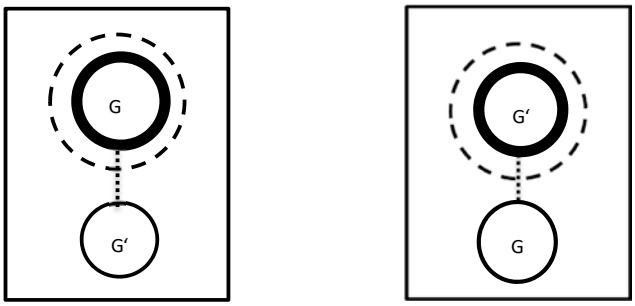
（6b）In my next movie I play a double-agent. Both CIA and the KGB are trying to kill me.

（Langacker 1985: 129f.）

私の次の映画では，二重スパイを演じる。CIAとKGBの両方が私を殺そうとする。

「言い換え」と「異世界自己同一視」は，on stageの図（1c）から派生したものとして，次の図に示されている。図中のG'は本来のgroundとは異なる次元のgroundを示し，GとG'を結合する点線は両者が同一と見なされていることを示す。話し手本人が，言い換えではprofileされるground，異世界自己同一視では参照点となるgroundである点は異なるが，いずれもprofileされるgroundを観察するのに，さらなるgroundが必要であることを示している。

上記の派生パタンに関するLangacker（1985）の見解にも，いくつかの問題が見受けられる。



(2a) 言い換え **displacement** **(2b)** 異世界自己同一視 **cross-world identification**

図 2　deictic /on stage（図1c）の派生パタン　（Langacker 1985: 128）

Langacker（1985: 128）は，図（2a）の言い換えが図（1b）の offstage に一致するとも主張する。確かに図（2a）と（2b）は ground が offstage に位置する点では図（1b）に近いが，これはそもそも図（2a）と（2b）を図（1c）の on stage の亜種とする見解に矛盾する。さらに Langacker（1985: 128）は，ground の参照点となる G’ を担うのは聞き手である子供ではなく，子供の視点をとる話し手であるとする。しかし導入される新たな G’ が話し手以外であるからこそ，言い換え displacement が成立するのではないだろうか。

また「異世界自己同一視 cross-world identification」は，一見自分自身を描写する場合の特殊事例のように思われる。しかし自分の体験を相手に聞かせたり，日記に書いたりするように，観察者が自らを観察する場合，観察される存在としての自己の次元と，観察者としての自分が属する次元は，異なる方がむしろ一般的である。冒頭の例（2）において，話し手が分析的に解説する自分自身は，発話時の場面にありながらも，その周知の事実を形成するに至る過去の経験という次元も含んでいる。観察する自分と観察される存在としての自分は，概念上のみならず，事実としても，異なる世界に属するとみなすべきであろう。

Langacker（1985）の視角構図における問題点は，観察者と観察対象の対立を出発点とするにもかかわらず，ground において観察者と観察対象の両方が混在することに起因する。そしてこれらの要素が混在する根本的な要因は，言語記号が話し手や聞き手，表現内容に対してどのような機能を果たし，またどのように位置づけられるかを考察していないことにある。

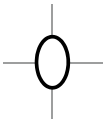
実は指示場の中心とされる Bühler（1934/1982）の Origo「原点」にも，ground と同様の問題があり，しかもそれは異なる角度から論じられている。また発話状況に基づく言語記号を扱ったモデルとして，Bühler（1934/1982）による言語オルガノン・モデルがある。そこで，まず Origo とその諸問題を取り上げ，これらを言語オルガノン・モデルに基づいて考察する。

3．Origo と言語オルガノン・モデル das Organonmodell der Sprache[7)]

3.1 Bühler（1934/1982）によるOrigo の特徴と問題点

Origo は，Langacker（1985）の ground と同様，reference の拠点に相当するが，その概念の由来は少し異なり，観察者と観察対象との対立を出発点とするものではない。次の引用に見られるように Bühler（1934/1982）は Origo を導入する際，まず指示場を座標に見立て，指示場の中心をその座標の「原点」すなわち Origo とする。そのうえで Origo は，話し手や発話時，発話場所に結びつけられる。

（7）Zwei Striche auf dem Papier, die sich senkrecht schneiden, sollen uns ein Koordinatensystem andeuten, O die Origo, den Kooridinatenausgangspunkt:



Ich behaupte, daß drei Zeigwörter an die Stelle von O gesetzt werden müssen, wenn dies Schema das Zeigfeld der menschlichen Sprache repräsentieren soll, nämlich die Zeigwörter *hier*, *jetzt* und *ich*. […]

An der Lautform der Wörtchen *jetzt*, *hier*, *ich*, an ihren phonematischen Gepräge, ist nichts Auffallendes; nur das ist eigenartig, daß jedes von ihnen fordert: schau auf mich Klangphänomen und nimm mich als Augenblicksmarke das eine, als Ortsmarke das andere, als Sendermarke（Sendercharakteristikum）das dritte.（Bühler 1934/1982: 102）

紙の上の垂直に交わる二直線は座標体系を，0 は原点（Origo），即ち座標の出発点を表しているものとする。

この図式が人間の言語の指示場を表示するとすれば，三つの指示詞が 0 の代わりに据えられなくてはならないというのが私の主張である。その三つの指示詞が hier, jetzt, ich というわけである。（中略）

jetzt, hier, ich という音声形式の音素的特徴には，なんら特別目だつものはない。特徴的なのはただ，これらの語がそれぞれ次のような要請を行っていることである。音響現象である私に注目し，jetzt については，私をその瞬間表示とし，hier については私をその場の表示とし，ich については私をその送り手[8)]（送り手の特徴）の表示としなさい。

（120−121，一部改訳）

7）3 の内容は，瀧田（2017a）における Origo に関連する部分に焦点を絞り，2016 年 11 月 26 日に日本独文学会西日本支部研究発表会で発表した内容を，本論文の構成に従って修正したものである。

8）Bühler（1934/1982）は言語記号を表出する主体を「送り手 Sender」と呼ぶが，これは 3.2 で紹介する言語オルガノン・モデルに由来する。この「送り手 Sender」にはいわゆる「話し手」も含まれる。冒頭のドイツ語のレジュメでもこの用語を用いたが，以降，論文本文でも原則として「話し手」の代わりにこの用語を用いるものとする。

(7) の引用によると，Origo の代わりに指示場の中心として機能する三つの指示語 hier「ここ」，jetzt「いま」，ich「わたし」は，呼びかける相手に対して，話し手に相当する Sender「送り手」の位置やその発話の瞬間，そして送り手本人への注意を促す。

ところがこれらの言葉の実例に着目すると，厳密に発話地点，発話時，発話している送り手本人を表すことはむしろまれである。Herbermann（1988: 42）は，(8) が発話時点の話し手に密着するコンテクストにおいて発話される場合，hier は不要であると指摘する。出かけようとして玄関先で雨が降っているのに気付いたとき，ドイツ語では (8) のように hier は含まれず，hier を加えるとかえって不自然な文となる。興味深いことに，日本語でもこの場合「雨が降っている」とは言っても，わざわざ「ここで雨が降っている」とは言わない。また (9) の文はこれを発話する全ての存在にあてはまるにも関わらず，Herbermann（1988: 16）によると，hier, jetzt, ich が本当に発話地点，発話時点，発話している当人を指すのは，極めて特殊なコンテクストでのみ成立する。つまり一緒に行動していた二人がしばし別行動をとった後，見通しのきかない場所で一人がもう一人の相手に自分の居場所を知らせるような場合である。

（8） Es regnet. （Herbermann 1988: 42） 「雨が降っている」

（9） Ich bin jetzt hier. （Herbermann 1988: 16） 「私は今ここにいます」

これらの指示語が厳密に発話地点，発話時点，現に話している送り手本人を指すことは，実のところ，極めて困難である。Klein（1978: 21）によると，次の例の jetzt は一見発話時点を示しているようだが，実はそうではない。この発言で jetzt という瞬間が本当に 12 時 23 分 17 秒であるかは疑わしいからである。

（10） Es ist jetzt genau zwölf Uhr, dreiundzwanzig Minuten und siebzehn Sekunden. （Klein 1978: 21）
今ちょうど 12 時 23 分 17 秒だ。

このような Origo を巡る議論は，言葉によって表現される Origo が，発話地点，発話時点，現に話している送り手本人と厳密には区別されることを示唆している。例えば何か書き物をしている相手に何をしているのかと尋ね，相手は書く作業を一旦やめて，「私は今手紙を書いているところだ」と答えたとしよう。先の Herbermann（1988）の裏付けにもなるが，この「私」も「今」も自然な日本語としてはかなり不自然である。しかし敢えてそう発言した場合，この「私」は厳密に送り手本人を，「今」は発話時を指すといえるだろうか。実はそうではない。なぜなら送り手は発話時において相手の質問に答えているのであって，手紙を書いているわけではないからである。同様の主張はすでに時枝（1941/2007）にあり，次の引用では，主体と客体化され素材化された主体が明確に区別されることが指摘されている。

(11) 文法上の第一人称が主体と考えられることがある。成る程，「私は読んだ」という表現に於いて，この表現をしたものは，「私」であるから，この第一人称は，この言語の主体を表している様に考えられる。しかしながら，猶よく考えて見るに，「私」というのは，主体そのものでなくして，主体の客体化され，素材化されたものであって，主体自らの表現ではない。客体化され，素材化されたものは，もはや主体の外に置かれたものであるから，実質的に見て，「私」は前例（「猫が鼠を食う」）の「猫」と何等択ぶ処がなく，異る処は，「私」が主体の客体化されたものであり，「猫」は全然第三者の素材化されたものであるということであって，そこから第一人称，第三人称の区別が生ずる。従って，「私」は主格とはいい得ても，この言語の主体とはいい得ないのである。この様に第一人称は，第二，第三人称と共に全く素材に関するものである。後に述べることであるが，第二人称も場面即ち聴手そのものではなく，聴手の素材化され，客体化されたものであるのと斉しい。この考方は極めて重要であって，かようにして，言語の主体は，絶対に表現の素材とは，同列同格には自己を言語に於いて表現しないものである。 （時枝 1941/2007: 59）

（強調及び括弧内の文「猫が鼠を食う」の補足は本論文著者による）

ところで3.1の冒頭でOrigoをLangacker（1985）のgroundに類する概念として導入したが，Origoにはgroundと大きく異なる点がある。それは，Origoが話し手以外の者も受け入れるという点である。従って「言い換えdisplacement」（図2a，例文5b）ではgroundとしてそのまま受け入れられなかった聞き手（子供）も，Origoについては問題なく適用される。後に4で紹介するFricke（2003）の実験例（12）は，その典型である。

3.2 言語オルガノン・モデルの概要とOrigoの位置づけ

3.1で示したように，Origoの代用とされる指示語hier，jetzt，ichの表現内容と，発話地点，発話時点，送り手本人との間には本質的な隔たりがある。3.2ではその隔たりの要因をBühler（1934/1982）の「言語オルガノン・モデルdas Organonmodell der Sprache」に基づいて考察する。

言語オルガノン・モデルの構想は，プラトンの『クラテュロス』に由来する。これは名前の正しさを議論する対話篇で，名前は名付ける作用のための道具（オルガノン）と見なされる。この構想に基づき，言語を「ある者が―もう一人の者に―事物について」伝達する道具としたのが言語オルガノン・モデルである。最終的に話し手に相当する「ある者」は「送り手Sender」，聞き手に相当する「もう一人の者」は「受け手Empfänger」，言語記号により叙述される「事物」は「対象と事態Gegenstände und Sachverhalte」となる。送り手，受け手，対象と事態は言語記号を囲む三つの基盤とされ，言語記号（Zeichen）はその中央に位置づけられる。

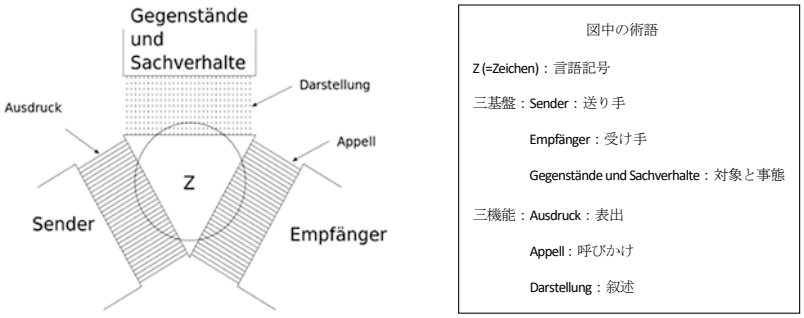


図 3　言語オルガノン・モデル das Organonmodell der Sprache[9)]

このモデルは，具体的な発話現象における記号としての言語の機能をいわば言語の外側から，発信者と受信者，そして叙述内容との相互関係として多角的にとらえたモデルで，あらゆる言語に適用されることが前提となっている。言語記号を囲む点線円は，具体的な音響現象を，三角形は現象を記号化する三つの局面を表し，それぞれ三基盤に対応する。直線群は，その局面の機能を示している。つまり言語記号とは，送り手の内的なものの表出（Ausdruck）機能を果たす兆候（Symptom）であり，受け手への呼びかけ（Appell）機能を果たす信号（Signal）であり，対象と事態の叙述（Darstellung）機能を果たす象徴（Symbol）である。

この三基盤と三機能は均一ではない。三基盤の送り手と受け手が単一要素であるのに対し，対象と事態には二つの要素が含まれる。また三機能の表出と呼びかけは実線で表示されるのに対し，叙述は点線表示である。Bühler（1934/1982: 30）によると，対象と事態は，事物（Dinge）である対象（Gegenstände）だけでなく，事物間の相関関係たる出来事（Sachverhalt）も含まれるが故に二重表示となる。叙述を点線で表示する理由を説明する箇所はないが，Bühler（1934/1982: 30）は，実際の言語記号の音形と事物との間には類似性がなく，過去の類似性も定かではないことを指摘しており，言語記号による対象と事態の叙述の間接性が示唆されている。

さらにモデル全体に視野を広げると，叙述は言語の内側と外側を隔てる境界線上にあることがわかる。つまり送り手と受け手と言語記号からなる領域は，言語を運用する外側の世界である。それに対して「対象と事態」の領域は，言語記号による叙述内容の世界である。叙述がいわば言語外と言語内の二つの世界をつなぐ境界であれば，点線で表示するのは極めて合理的と思われるが，この主張は Bühler（1934/1982）のどこにも記載されていない。

では3.1で問題となった指示語 hier, jetzt, ich と送り手との関係を，このモデルに当てはめてみよう。まず指示語 hier，jetzt，ich そのものは，言語記号（Z）に位置づけられる。すると言語記号の叙述（Darstellung）機能により表現される内容は，送り手（Sender）ではなく，対象と事

9）図 3 は Wikipedia「Organon-Modell」に収録されている言語オルガノン・モデルを，Bühler（1934/1982: 28）に記載されている das Organonmodell der Sprache と同一と判断したうえで引用した。そのホームページ（https://de.wikipedia.org/wiki/Organon-Modell）には 2017/4/16 にアクセスした。

態（Gegenstände und Sachverhalte）に属することがわかる。送り手は表出機能を果たすが，叙述の対象とはならない。従ってこれまで述べてきたOrigoは，図4のように言語オルガノン・モデルの二カ所に存在する。

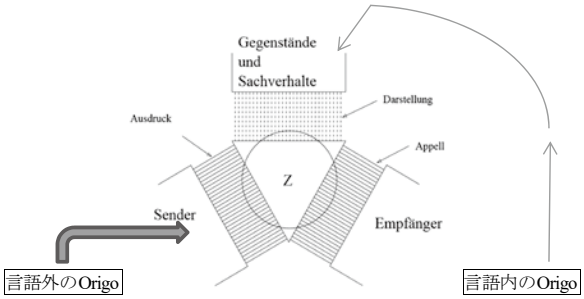


図4　言語のオルガノン・モデルにおける二つのOrigoの位置

一つは送り手に帰属するOrigoである。送り手は表出する主体であって，叙述内容ではないことから，現に発話する送り手，発話地点，発話時点は容易に言語では表現しえない。故にこの送り手に帰属するOrigoを「言語外のOrigo」と呼ぶことにしよう。一方hier，jetzt，ichといった言葉によって叙述されるOrigoは，対象と事態に属する。このOrigoは言葉の表現内容であることから「言語内のOrigo」と呼ぶことにしよう。以上のように，hier，jetzt，ichのような言語記号の表現内容が，発話地点，発話時点，送り手本人に結び付かないメカニズムは，このモデルによって明確に表示することができる。

冒頭で言及した三浦（1976）による観念的な自己分裂は，「言語外のOrigo」と「言語内のOrigo」との分裂としてとらえられる。また引用(11)の時枝（1941/2007: 59）にある客体化された主体は「言語内のOrigo」であり，主体は「言語外のOrigo」に相当する。そしてLangacker（1985）のgroundには，この二つのOrigoが混在するのである。

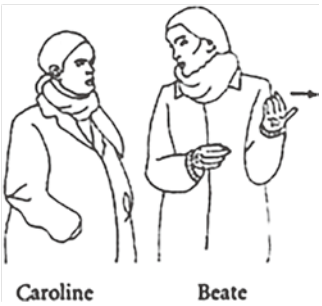
4．二つのOrigoの共起と視点の関与

3で導き出した二つのOrigoのうち，「言語内のOrigo」としては(9)，(10)のような具体的なダイクシス表現の例を挙げることができるが，「言語外のOrigo」はどのような形で実現するのだろうか。ここでは「言語内のOrigo」と「言語外のOrigo」が実際に共起する具体例としてFricke（2003）による調査例を挙げ，二つのOrigoの相互作用について考察する。

Fricke（2003）の調査では，ドイツ語母語話者の大学生33名を三つのグループA, B, Cに分け，グループAのメンバーは各自歩いた道順をグループBのメンバーに伝え，グループBのメンバーはその道順をグループCのメンバーに伝える。次の例はグループBの一人Beateが，グループAのメンバーから聞いた道順をグループCの一人Carolineに説明する発話である。

（12）Dann soll irgendwann links ein Arka/ ein Eingang zum Arkadenzentrum kommen oder so was. Ich kenns leider nich, aber es soll dann also［links von dir］irgendwann Arkaden, zwischen den Häusern irgendwann stehen und da sollst du reingehen, nach links, ja?　（Fricke 2003: 78）

そしたら，そのうち左側にアーケ，アーケードの（ショッピング）センターの入り口らしいものが見えてくるそうよ。悪いけどよくわからない。でもそのとき［あなたから見て向かって左側に］アーケードが，建物の間にそのうち見えてくるはずだから，そしたらそこから入っていけばいいのよ，左方向よ，いい？



下線部の道案内と同時に行われるジェスチャー（Fricke 2003: 78）

下線部の links von dir「あなたから見て向かって左側に」という発言において，送り手 Beate は，言語上は dir を基点として方向を規定している。つまり「言語内の Origo」は，受け手である Caroline にある。しかしイラストにあるように，Beate はその発言と同時に自分を中心として自分の左側を指し示す。このときしぐさの基準としての Origo，つまり「言語外の Origo」は話し手 Beate にある。以上のようにこの事例には，「言語内の Origo」と「言語外の Origo」の共起が明示されているとともに，二つの Origo の共存が示されている。

では，二つの Origo はどのように共存しあっているのだろうか。

先行研究においては主に「言語内の Origo」が扱われている。Bühler（1934/1982）は，Origo を導入する際，hier，jetzt，ich という指示語に依拠している。また Origo はダイクシス現象を説明するための概念だが，そのダイクシスの最も簡易的な定義は，Diewald（1991: 3）によると，sprachliches Zeigen「言語による指し示し」である。Langacker（1985）においても，観察者を念頭に置きつつも叙述スコープ内の ground のみがダイクシス表現に結び付けられている。事実，送り手に帰属する「言語外の Origo」は通常意識されず，「言語内の Origo」と同一視されている。このようにダイクシスが言葉をよりどころとすることを考慮すると，対象と事態に帰属する「言語内の Origo」の方がダイクシスにおいて中心的かつ顕在的であるといえる。それに対して，本源であるはずの「言語外の Origo」は副次的で潜在的なものとして位置づけられる。

では，「言語外の Origo」はいったいどのような機能を果たすのだろうか。

ここで（12）の事例を改めて検討すると，送り手 Beate による左側を指し示すしぐさは，明ら

かに「言語内の Origo」である Caroline の立場を取っている，つまり Caroline の側に視点を置いている。事例（12）は，送り手 Beate が「言語外の Origo」であると同時に「視点」の具現でもあることを示している。Langacker（1985）が，offstage 及び on stage の視角構図において叙述スコープにあるはずの ground を観察者と見なすことができる原因もこの視点の機能に由来する。つまり送り手には，「言語外の Origo」と「視点」の機能が統合されているのである。

5．二つの Origo と視点による Langacher（1985）の再解釈と叙述のメカニズム

4 の考察結果により，Langacker（1985）における主観性と叙述の関係は根本的に解明される。

まず叙述のスコープは，言語記号の叙述機能の対象であることから，言語オルガノン・モデルの対象と事態に相当する。

図（1a）の非ダイクシス的な視角構図では，ground は叙述スコープの外にある。この ground はちょうど送り手の領域内の「言語外の Origo」に相当する。一方，叙述スコープ（対象と事態）内に ground は存在しない。つまり「言語内の Origo」は完全に排除されている。送り手は叙述スコープ内に視点を置くよりどころがないために，叙述内容にはダイクシス的要素が介入せず，その結果，叙述は非ダイクシス的，つまり「最大限に客観的」となる。

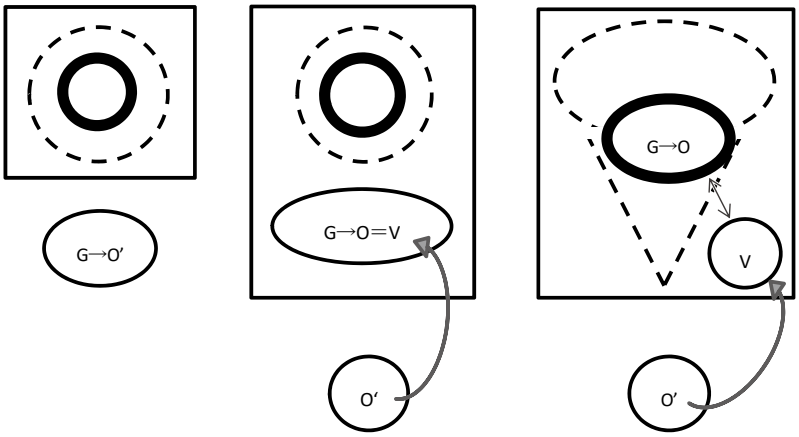
ダイクシス表現が関わる視角構図に関しては，ground は叙述スコープ内，つまり対象と事態の領域に設定される。従って，図（1b）と図（1c）の ground は「言語内の Origo」に相当する。

図（1b）の offstage の場合，ground（「言語内の Origo」）から profile を指定する。図示されていない「言語外の Origo」である「送り手」は，図（1a）と同様，叙述スコープの外に位置づけられるが，Origo という性質を共有する「言語内の Origo」に視点を置くことができる。この視点が「言語内の Origo」と一致するとき，送り手が持つ言語化されない性質により，この「言語内の Origo」は言語上明示されなくなる。これが offstage における叙述のメカニズムである。Tuesday was hectic（Langacker 1985: 113）「火曜日は忙しかった」，Es regnet（Herbermann 1988: 42）「雨が降っている」（例文 8）という文を口にするとき，火曜日や雨が降る場所を指定する「言語内の Origo」は，送り手に帰属する発話時点と発話場所に一致する。つまり送り手の視点は完全に「言語内の Origo」に置かれるが故に，「言語内の Origo」は言語上明示されない。見方を変えれば，「言語内の Origo」が言語上明示されないからこそ，「言語外の Origo」が想起され，その描写はまるでその場に送り手が居合わせるかのような効果を発揮する。物語の会話文の例（1）はまさにその典型で，話し手は自分の目の前で起こっていることを自ら直接かかわるものとして描写する効果的な手段として，自分を描写しないのである。

他方，図（1c）の on stage では，ground（言語内の Origo）が叙述スコープ内の舞台上で profile され，言語上明記される。送り手は「言語外の Origo」として，依然として叙述スコープの外に位置する。ただし offstage の場合とは異なり，視点が「言語内の Origo」に束縛されないダイナ

ミックな描写が可能となる。つまり profile される ground（言語内の Origo）が叙述される際，言語外の Origo は，ある時には profile に視点を接近させてその立場をとり，またある時は視点を引き離して分析する立場をとるのである。会話文の例 (2) では，送り手が自分自身から視点を引き離して，これを分析的に描写する。一方道案内の例 (12) は，送り手が受け手を「言語内の Origo」として客体化し，それに視点を近づけて観察している例である。

二つの Origo と視点を導入した Langacker（1985）による三つの視角構図は，図 5 の通りである。図中の O は「言語内の Origo」，O’ は「言語外の Origo」，V は視点（point of view）を示す。



(5a) non deictic　**(5b) deictic / offstage**　**(5c) deictic /on stage**

図 5　二つの Origo と視点を導入した Langacker（1985: 125）の視角構図

図 5 のように二つの Origo を導入する最大の利点は，「言語外の Origo」が叙述の主体として常に叙述スコープの外に，「言語内の Origo」が叙述の対象として常に叙述スコープ内に位置づけられることにより，叙述の秩序が保たれるという点にある。さらに視点を仲介させることにより，offstage の視角構図（図 1b，図 5b）では，ground（言語内の Origo）が叙述されない根拠として「言語外の Origo」の影響を提示することができ，on stage の視角構図（図 1c，図 5c）では，ground（言語内の Origo）と視点の関係によって描写の違いを説明することができる。

図 5 に基づいて考えると，Langacker（1985）における「言い換え」（例文 5b，図 2a）は，図 (5c) の on stage の一つと見なされる。つまり子供を中心に自分を「あなたのお母さん」と呼ぶ場合，叙述スコープは聞き手を中心とする領域であり，「言語内の Origo」は聞き手（your）となる。聞き手は your という形で言語上明記されているため on stage で，話し手はその「言語内の Origo」(ground) からさらに profile として指定される。「異世界自己同一視」（例文 6a，6b，図 2b）については，話し手は「言語外の Origo」であり，写真や映画を叙述スコープとしてとらえ，その中の自分を「言語内の Origo」とすれば，図 (5c) の on stage に問題なく適合する。

6．結論と今後の課題

結論として，冒頭で提起した二つの問題を検討しよう。

話し手の目の前で今まさに展開するという (1) のような臨場感あふれる描写は，話し手が明示的に記述されないことと，なにか必然的なつながりがあるのかという問題については，あるという結論に達した。そのメカニズムは次の通りである。言語オルガノン・モデル（図 3，4）で示したように，送り手は，言語記号の介在により必然的に，言語表現の内容に相当する叙述スコープ（対象と事態）の領域の外側に「言語外の Origo」として位置づけられる。その叙述スコープ内の叙述内容がまさに自分の身の回りで起こっているものとして表現するためには，まずダイクシス表現などのダイクシス的要素により，自らの存在を暗示する「言語内の Origo」を叙述スコープ（対象と事態）に設定しなくてはならない。そこに描写の拠点，視点を置くことにより，初めて描写する出来事が自分に直接かかわるものとして描写することが可能になる。その際，送り手の「言語外」の性質がこの「言語内の Origo」に反映され，言語上明示されなくなる。逆の見方をすれば，言語上明示されないからこそ「言語外の Origo」たる送り手が想起され，その描写はまるでそこに居合わせているかのような効果を発揮する。

さて第二の問題は，話し手が自らを描写対象とする場合，描写の主体と客体に自己分裂するとみなすのは言葉の意味を考えるうえで適切か，もし適切であるとすれば，この自己分裂と (1) のような事例の間にはどのような連続性があるのかというものであった。言語オルガノン・モデルに見られるように，言語記号が送り手と表現内容を仲介することから，「言語外の Origo」と「言語内の Origo」への自己分裂は必然的に成立する。(2) の場合，「言語内の Origo」は一人称代名詞により言語上明示されることから，on stage の視角構図（図5c）に当てはまる。このとき送り手は「言語外の Origo」として叙述スコープ外から叙述スコープ内に視点を送るが，(2) の「言語内の Origo」は外側から観察されていることから，視点は「言語内の Origo」の外側に置かれていることがわかる。従って，(2) の文中の heraus によって表現される方向は，その視点への方向に一致し，内なる領域から話し手側の外への方向というダイクシス的意味に適合する。同じ on stage の視角構図に当てはまる事例であっても，(12) の場合は，送り手は「言語内の Origo」である dir の立場をとることから，視点は「言語内の Origo」に非常に近い。そして (1) の offstage の場合，視点は「言語内の Origo」に完全に一致する。このように (1) と (2) との間には，視点と「言語内の Origo」との距離による連続性が成立する。

二つの Origo と視点により，上記の問題を解決することはできたが，そのプロセスにおいて，また次の問題が生じている。

コンテクストは限定されるものの，(9) のような「私は今ここにいる」という表現における「私」「今」「ここ」は，言語上明記されるにも関わらず，送り手本人と発話時，発話地点を指すことが可能である。問題の鍵はその限定されたコンテクストにある。Herbermann（1988）が提

示した状況は，一緒に行動していた二人がしばし別行動をとった後，見通しのきかない場所で一人がもう一人の相手に自分の居場所を知らせるような場合であった。この場合，受け手に対する呼びかけ（Appell）が非常に強く機能している。このダイクシスのありようは，送り手が対象と事態への叙述により指し示すケースとは一線を画している。なぜならこのとき送り手は，言葉の表現内容によって指し示すのではなく，言語形式を構成する音声などの感覚データを自分自身の位置を知らせる信号として受け手に発信しているからである。つまり自分の居場所を相手に知らせるのであれば，その意味を持った言葉である必要はなく，相手の名前やその人特有の合図や悲鳴であってもかまわない。Bühler（1934/1982: 92）は，この指示のやり方（Zeigart）を Hic-Deixis「ここ―ダイクシス」の原型とし，他の指示のやり方に対立させている。このような受け手への呼びかけ機能に関わる一連の現象を今後さらに検討する。

また Langnacker の三つの視角構図のうち，送り手が臨場感を持って描写するのは，offstage の視角構図（図 1b，図 5b）だが，on stage の視角構図（図 1c，図 5c）に分類される事例には，道案内の事例（11）のように「言語内の Origo」に極めて近い視点をとるもの，つまり offstage に近いものがあると推定される。offstage と on stage に相当すると思われる事例は物語に多く見られ，その分析により視点の様々な特徴が明らかになるであろう。こうしたフィクションにおける具体的な用例検討も今後の課題としたい。

謝辞

寺門伸先生には長年にわたり貴重な御意見と御指摘を賜りました。「言語外の Origo」と「言語内の Origo」という基本概念と名称は，言語オルガノン・モデルに関する議論の過程でご提案くださったもので，「ここ―ダイクシス Hic-Deixis」の特異性についてもご指摘も賜りました。いずれも私にとって青天の霹靂でした。ここに心から感謝の意をささげたいと思います。Langacker（1985）の offstage と on stage の導入は，もともと 2017 年度日本独文学会秋季研究発表会に先駆け日本独文学会から提案されました。関係者の皆様にも心より御礼申し上げます。また Die unendliche Geschichte の例文収集に多大なご助力を賜りました大阪大学非常勤講師の村上八重子先生にも心より御礼申し上げます。本論文は JSPS 科研費 JP253704300 の助成を受けたものです。

主要参考文献

Bühler, Karl（**1934/1982**): Sprachtheorie. Die Darstellungsfunktion der Sprache, Fischer, Stuttgart, 1982（Nachdruck von 1934).（脇坂豊・植木迪子・植田康成・大浜るい子共訳『言語理論　言語の叙述機能　上巻』クロノス，1983）

Diewald, Gabriele Maria（**1991**): Deixis und Textsorten im Deutschen（=Reihe Germanistische

Linguistik 118), Niemeyer, Tübingen.

Fricke, Ellen（2003): *Origo*, pointing, and conceptualization - what gestures reveal about the nature of the *origo* in face-to-face interaction, in: Lenz, F.（ed.): Deictic Conceptualisation of Space, Time, and Person, Amsterdam/Philadelphia, 69–93.

Hamburger, Käte（**1977**): Die Logik der Dichtung, Klett-Cotta, Stuttgart, [3]1977.（植和田光晴訳：『文学の論理』松籟社，1985.）

Herbermann, Clemens-Peter（**1988**): Modi Referentiae. Studien zum sprachlichen Bezug zur Wirklichkeit, Winter, Heidelberg.

Klein, Wolfgang（**1978**): Wo ist hier? Präliminarien zu einer Untersuchung der lokalen Deixis, in: Linguistische Berichte H.58. 18–40.

Langacker, Ronald W.（**1985**): Observations and speculations on subjectivity, in: Iconicity in Syntax, 109–150.

三浦つとむ（1976）：『日本語とはどういう言語か』講談社学術文庫.

宮崎清孝・上野直樹（1985）：『視点（＝認知科学選書第Ⅰ期第1巻)』東京大学出版会.

瀧田恵巳（2016）：「ダイクシス対象の知覚像と非現場的要素の介入」，『言語文化共同研究プロジェクト2015・時空と認知の言語学Ⅴ』大阪大学大学院言語文化研究科，21–30.

瀧田恵巳（2017a）：「人称と言語オルガノン・モデル」，『言語文化研究43号』大阪大学大学院言語文化研究科，97–118.

瀧田恵巳（2017b）：「コソアの意味記述と人称―「一人称」と「二人称」は「三人称」か？」，『言語文化共同研究プロジェクト2016・時空と認知の言語学Ⅵ』大阪大学大学院言語文化研究科，21–30.

時枝誠記（1941/2007）：『国語学原論（上）〔全2冊〕』，岩波書店（底本：『国語学原論』岩波書店，1941）.

プラトン（1974）（水地宗明訳）：「クラテュロス　―名前の正しさについて―」，『**クラテュロス・テアイテトス**（プラトン全集2)』，岩波書店.

例文出典

Ende, Michael: Die unendliche Geschichte, K. Thienemanns Verlag, Stuttgart, 1979.［略号 UG］（上田真而子・佐藤真理子訳『はてしない物語』岩波書店1982年。）